

SNSによる大学生のコミュニケーションについて
— 自己隠蔽度が人間関係に及ぼす影響 —

中 田 美喜子

The communication by SNS for college students
— The effects of self-concealment degree for human relations —

Mikiko NAKATA

SNSによる大学生のコミュニケーションについて

—自己隠蔽度が人間関係に及ぼす影響—

中 田 美喜子

The communication by SNS for college students

— The effects of self-concealment degree for human relations —

Mikiko NAKATA

〔キーワード：自己隠蔽，SNS，ブログ〕

SNSやブログなど大学生のコミュニケーションは変化している。自己隠蔽度とこれら新しいコミュニケーションによる人間関係がどのように影響があるかについて調査した。自己隠蔽とSNS，ブログなどへの書き込みには有意差が認められた。

The communication of college students is changing by SNS or blog. Human relations by self-concealment degree and these new communication was investigated how there is an influence. Self-concealment was observed to a significant difference in writing blog and SNS.

はじめに

近年，SNSやブログなどインターネットを通して，同じ趣味を持つ人や気の合う人と簡単に人間関係を築くことができるようになった。これらの人間関係は文字コミュニケーションから始まっている。中田（2012）において，インターネットを通じたネット上だけの友人がいる学生は全体の3割と少ない結果が出ている。これは，実際の友人との関係に満足している学生が多いため，ネット上だけの友人を求めていると考えられる。また，ネット上に友人がいる学生においても，その友人と実際に会ってみたいと回答した学生は3割であることから，ネット上の友人はインターネット上だけというように割り切った人間関係を築いている学生が多いようである。学生は対面でのコミュニケーションが取れる相手と深い人間関係を築いていると思われる。しかし，対面でのコミュニケーションにおいても，大学内と大学以外では友人の違いを感じる学生が全体の半数を占めている。学生は交友関係において「評価過敏・傷つき回避」「関わり苦手意識」をもち，人との関りを苦手としている学生が多いことが認められた。また対面コミュニケーションを行う友人に対して，人間関係が円滑にいくことを優先するために，自分の気持ちや考えをきちんと伝えることを避ける「自己隠蔽」の傾向が強いという結果が示された。この結果から友達の評価に過敏となり，友人関係で自分が傷つくことを恐れる学生が多く存在することが認められた。

現代の若者と交流するにおいて，彼らの友人関係の特徴をとらえて対面していくことで，指導や対応がスムーズに行われる可能性がある。本調査によって，「今の若者は」といったネガティブな対応をすることなく，彼らとともに社会を創っていくことが可能となると思われる。

2011年，女子大生による調査を報告した（中田・記谷，2011）。その結果を2007年（尾上，2007）の調査と比較したところ。パソコンの所有率が16.4%から48.6%へ増加している。このことから一家に1台でパソコンを所有していた時代から1人に1台の時代へ変化していることが示された。今後もパソコンのコンパクト化が進み持ち運びやすくなり所有率は増加すると考えられる。情報伝達機器の利用状況や利用頻度について，2007年で

はSNSの利用頻度の回答として「毎日利用する」を選択した者が最も少なかったのに対し、中田ら(2011)の結果では「毎日利用する」を選択する者が最も多くなった。この結果は約5年の間にSNSが普及したことを示している。

自己開示度の高低群別分析では、「情報伝達機器を通じて知り合いと会ったことがあるか」という項目においては有意差が認められた。自己開示が高い人ほど積極的にネット上の友人に会いに行く傾向が示された。しかし、「情報伝達機器だけの友人と身近な友人で異なりを感じるか」という項目で有意差は認められなかったため、情報伝達機器での友人と身近な友人とではまだ同じものとして考えられるところまではいたっていないのではないかと考えられた。さらに2012年では男女大学生による調査を実施し検討を行った。その結果、「評価過敏・傷つき回避」「関わり苦手意識」をもち、人との関りを苦手としている学生が多いことが認められた。自分の気持ちや考えをきちんと伝えることを避ける「自己隠蔽」の傾向が強いという結果が示された。これらはSNSの利用における結果であるが、近年さらに親密なコミュニケーションを創れるSNSの利用が増大している。これによって、また新しい人間関係ができていく可能性があると思われる。本研究では、スマートフォンの普及により利用が増大してきたアプリケーションによる新しい人間関係を調査分析する必要があると思われる。2010年以前の報告では、大学によっては学生がSNSをほとんど利用していない大学もあった。2012年度の調査では、利用していない学生が大変少なくなっており、今後も大学による差は認められなくなってくると思われる。さらに地方、男女による差も認められにくくなる可能性がある。これらの結果から友達の評価に過敏となり、友人関係で自分が傷つくことを恐れる学生が多く存在することが認められた。大学のゼミなどの学生個別指導において、学生の傾向を認識した指導を行う必要があることが示唆されている。そのためにも、新しいコミュニケーションツールを追加した質問項目を作成し、人間関係の変化について比較分析していく必要があると思われる。

一方、コンピュータや携帯電話の普及に伴い、インターネットを利用した新しいコミュニケーションの方法が出現し、それを利用したコミュニケーションの機会が増加している。これらの新しいコミュニケーション方法は、コンピュータ間コミュニケーション(CMC)と言われ、大学生における人間関係にも様々な影響をあたえている(尾上, 2007, 橋元, 2008)。

SNSの普及により、非常に大きな変化が起こっている。例えば、地震などのニュースなどで取り上げられた話題がすぐにSNSに入ってくる。1995年1月17日に発生した阪神大震災に伴う混乱は、従来の通信連絡網が遮断・寸断された状況下であって人と人、人と情報を結ぶインターネットの必要性の大きさを感じた出来事であった。また2011年3月11日の東北大震災においても、ほとんどの電話が不通となり、携帯電話も中継局などの損害によりほぼ全滅となり、携帯メールも送付してから届くまでに数時間から数十時間を要したと報告されている。このような中、ほぼ通常と同じように使えた連絡手段は、ツイッター「安否確認だけでなく、政府や各自自治体、報道機関が発表した情報なども書き込まれたため情報入手手段として大変有効であった。また、特定の人との直接やり取りができるダイレクトメッセージは、電話やメールのやり取りができないときに有効であった。」スカイプ(インターネット電話)「都内では地震発生数時間後に通話できたが、緊急電話番号への発信は難しかった。」災害用伝言板「パソコンや携帯電話から書き込まれた伝言を閲覧できたが、回線が不安定な時間帯ではつながりづらかった。」ワンセグ放送「携帯電話回線やインターネット回線に接続されていなくても視聴でき、地震発生直後から安定していた。」これらが有効であったと報告されている。またGoogleメールサービス(Gmail)も比較的つながりやすかったと報告されている(目黒 他, 2011)。しかし、CMCの利用はメリットだけではない。リアルタイムで会話できることにより即時の返事を求められているような時間的切迫を感じ、掲示板やホームページでの誹謗中傷によって心を病み、パソコンや携帯電話など機器だけのやり取りに孤独感を感じるなどさまざまな問題点がある。

本研究では、SNSに代表される新しいコミュニケーションについて学生の自己隠蔽度と自己開示度との関連を見出し、どのように対応しようとしているのかを調査検討したので報告する。

方法

調査対象者および実施日

広島県内の大学生581名（男性171名，女性410名，平均年齢18.9才）を対象に，質問紙による調査を，2014年7月から10月に実施した。

調査の方法

アンケート内容は，性別，年齢，パソコンの使用頻度，携帯電話の使用頻度，友人関係について，パソコンを用いたコミュニケーションツールの利用頻度，SNSとブログを別々の項目を設けた。また，SNSブログの利用については自己開示につながる項目として坂本（2010）と同様の項目を設定した。携帯電話を用いたコミュニケーションツールの利用事項については，SNSブログ別に回答を求めた。自己隠蔽については，日本語版自己隠蔽尺度（河野，1998，2001）をもとに作成した。本論文では，自己隠蔽についてのみ分析検討したものを報告する。

教示では，研究の目的と意義および研究の方法とプライバシーの保護および不利益防止への配慮について説明し，承諾した人のみアンケートに参加を依頼した。同意書を提出した後，アンケートに記入し，終わった人から回収した。調査データは，すべて対象者番号をつけて扱い，個人が特定できないようにした上で統計的に処理した。分析はSPSS統計ソフトを使用した。

結果

自己隠蔽の項目ごとの平均値を表1に示した。それぞれの質問項目に対して，当てはまらないから，当てはまるまで5段階で回答を行った結果である。全体平均では，3以上の得点項目として「自分について人に話してないことがたくさんある」「隠しておきたいことを知られてしまうことがこわいと思うことがある」「自分の秘密を話しても，良いことはほとんどないから，できるだけ話さないようにしようと思う」が認められた。のほかの項目は2.5以上2.9以下の得点であった。特に偏差値の小さな項目については，ほとんどの学生がそのように感じている項目であるといえるため，気を付ける必要があると考える。

自己隠蔽の得点を集計し，平均値から自己隠蔽度の高い群と低い群に被験者を分けて分析を行った。パソコンの利用，「1日のパソコンの使用時間」「1日のパソコンメールの平均数」「1日の異なる人とのパソコンメールをやり取り人数」「1日の携帯電話の使用時間」「1日の携帯メールの平均数」「1日の異なる人との携帯メール

表1 自己隠蔽項目の平均値一覧

	平均値	標準偏差
誰にも打ち明けられない重要な秘密をもっている	2.9	4.2
自分の秘密はあまりにイヤなもので、他人には話せない	2.9	4.2
もし友達に自分の秘密を話したら、友達は私のことを嫌いになると思う	2.6	4.2
自分について人に話してないことがたくさんある	3.2	4.2
親友にも話せないことがある	2.9	4.2
自分を苦しめる秘密を持っている	2.6	4.2
何か悪いことが起こったときも人に話さないほうだ	2.9	4.2
隠しておきたいことを知られてしまうことがこわいと思うことがある	3.2	1.3
自分の秘密を話しても、良いことはほとんどないから、できるだけ話さないようにしようと思う	3.1	1.2
自分の秘密について聞かれたときは嘘をつこうと思う	2.8	1.2
自分自身について、人に打ち明けられないような否定的な考えをもっている	2.7	1.2
自分ことを人に話すことに抵抗を感じる	2.6	1.1
人に話しても自分の苦しみは分かってもらえないと思う	2.7	1.2

ルをやり取り人数」の項目において分析した結果、1日のパソコン利用の時間のみ有意差が認められた ($\chi = 15.08$, $df=5$, $p < 0.05$)。

結果を図1に示した。特にコンピュータの利用について今回の結果は利用時間が少ない結果になっている。これは10月の最初にアンケートを実施したものと7月のもので1年生が多く、コンピュータによる課題提出などが多数ある7月と講義の開始で課題の少ない10月でも違いがでる可能性があったため、アンケート調査の日程にも気を付ける必要があると思われた。

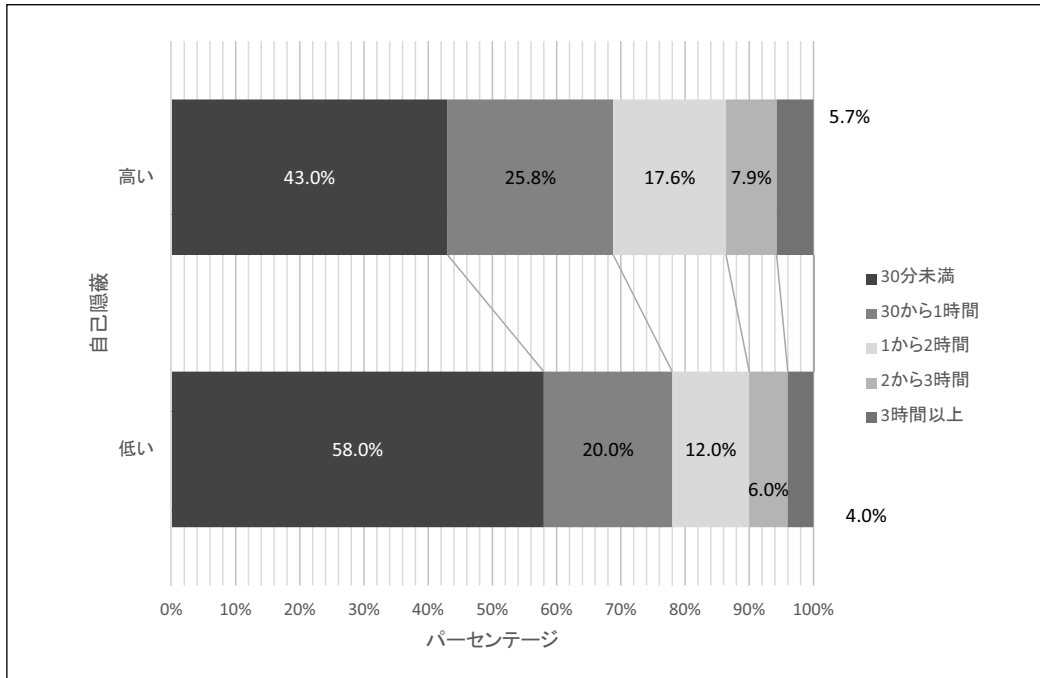


図1 自己隠蔽の高低群におけるPC利用時間

学生の日常生活および交友関係について、自己隠蔽度の高低群で比較した。「自宅か下宿か」「学内・学外を問わずクラブ、サークルや団体に入っていますか」「親しい友人の数」「学友たちと楽しくやっている」「学内はうわべだけの表面的な付き合いが多い」の項目についての回答を分析した。その結果、「親しい友人の数」において ($\chi = 16.66$, $df=4$, $p < 0.01$) と「学内はうわべだけの表面的な付き合いが多い」 ($\chi = 42.21$, $df=4$, $p < 0.01$) において有意差が認められた。自己隠蔽高低群における友人の数の一覧を図2に示した。特に自己隠蔽の低い群において、10人以上の友人があるものが有意に多く、1から9人までの人数は有意に少ないことが示されている。自己隠蔽度が高い場合、対面における対人関係においても人数が制限される関係になっている可能性があることが認められる。

また、「学内はうわべだけの付き合いが多い」についても図3に示した。その結果、自己隠蔽の低い群においては、「当てはまらない」17.6%、「あまり当てはまらない」34.9%、「やや当てはまる」17.3%、「当問春2.7%」であった。高い群においては、「当てはまらない」5.7%、「あまり当てはまらない」23.7%、「やや当てはまる」30.8%、「当てはまる」6.8%であった。この結果から、自己隠蔽の高い群では対面のコミュニケーションは表面的に対応している可能性が高いと思われる。

SNSに書き込む内容についての質問項目では「好きなもの(音楽・映画・服装など)」「休日の過ごし方」「最近の楽しかったできごと」「最近夢中になっていること」「趣味にしていること」「楽しみにしているイベント」「これから趣味としてやってみたいこと」については両群において、50%以上が「少し話す」「よく話す」という結果となった。楽しいこと、趣味についてSNSに多く書き込む傾向があることが示唆された。

群間においては「ささいな欠点かもしれないがときどき落ち込んでしまうこと」について有意な差が認められた ($\chi = 22.46$, $df=5$, $p < 0.01$, 図4)。どちらの群においても比較的書かない回答が多く、「何も話さない」

「ほとんど話さない」が自己隠蔽の高い群では76.7%と高い回答を示し、自己隠蔽の低い群では69.1%であった。また自己隠蔽の高い群では、「少し話す」が16.7%であり、自己隠蔽が低い群では22.7%であった。この回答の差が有意であった。これらの結果から、SNSに書き込む内容は、楽しいことや趣味について記載していくことが多いことが認められ、自己隠蔽の低い群では「個人的に落ち込んでしまうこと」なども「少し話す」という回答が自己隠蔽の高い群に比較して有意に多いことから、自己隠蔽の低い群では落ち込んでしまうことも書き込みを行っていく可能性もあることを示している。SNSへの書き込みについては、情報倫理などの科目でいろいろな犯罪に巻き込まれる可能性や、使い方について知識をもっているため、書き込みの内容については、気を付けて書いている可能性が高いと思われる。

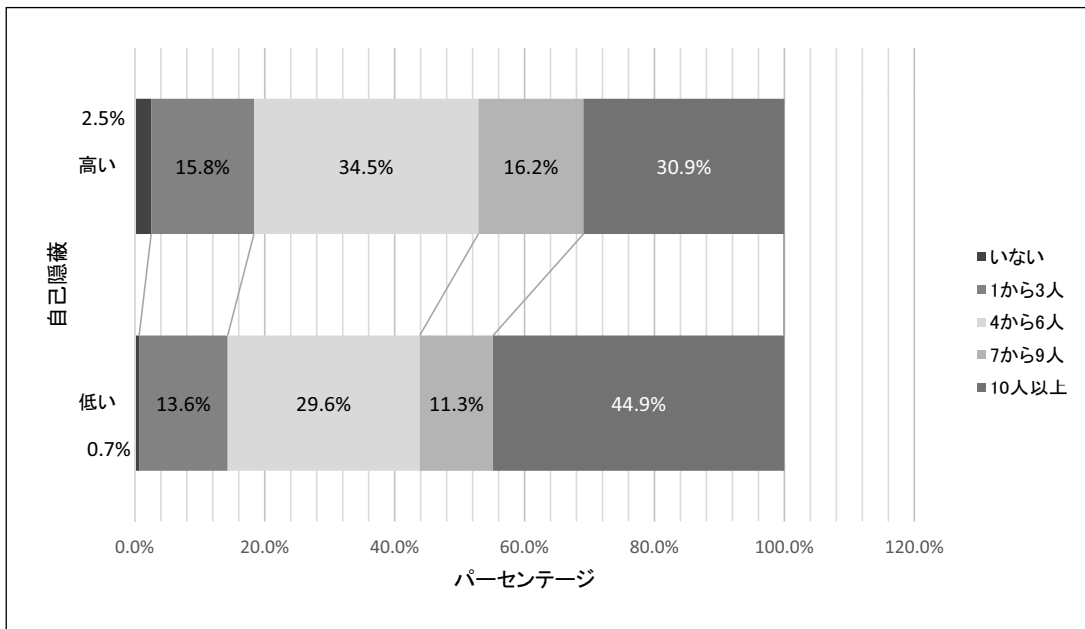


図2 自己隠蔽の高低群における友人の数

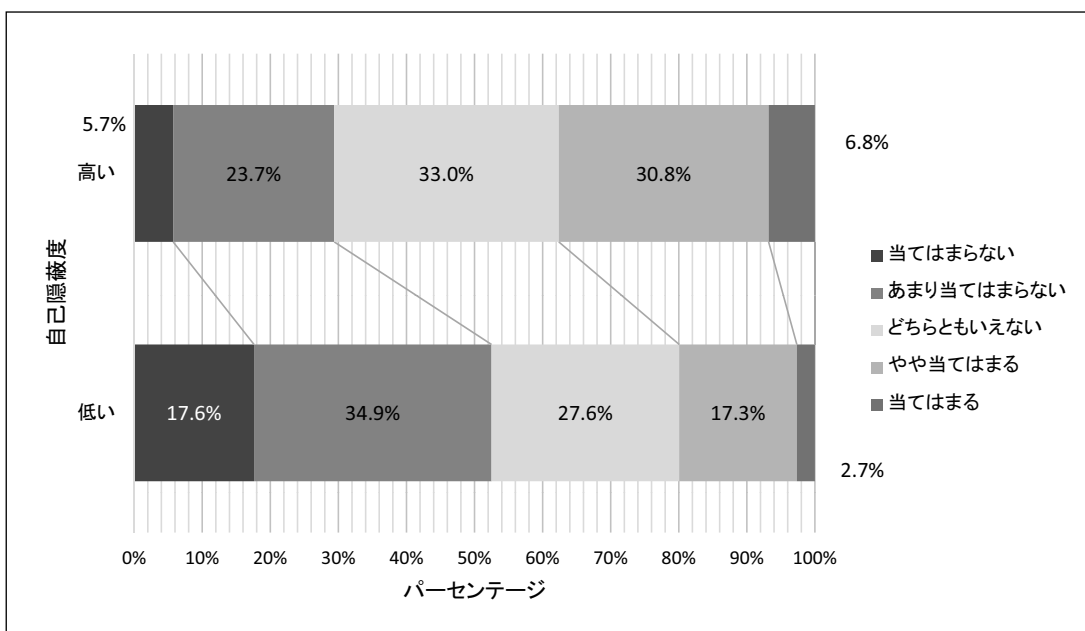


図3 自己隠蔽の高低群における学内友人における質問回答
(質問: 「学内はうわべだけの付き合いが多い」)

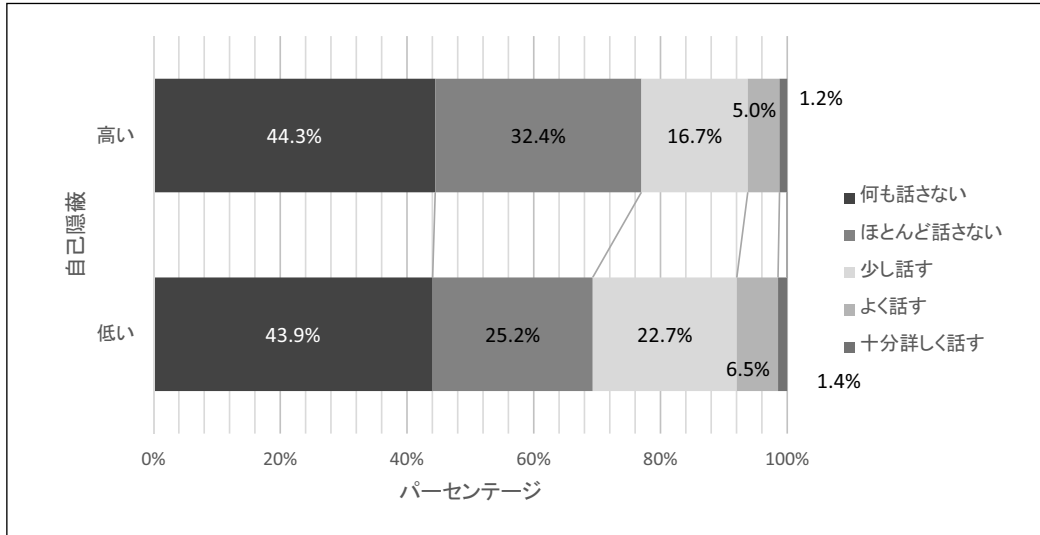


図4 自己隠蔽の高低群におけるSNSで書き込む内容
(質問:「ささいな欠点かもしれないがときどき落ち込んでしまうこと」をSNSに書き込むか)

まとめ

質問紙によって学生の新しいコミュニケーションの方法SNSやブログの利用について、自己隠蔽の高低によりどのような対応を行うかについて検討をした。その結果、自己隠蔽度が高い群においては、どの項目でも書き込みが少なく、身近な友人の人数も少ないことが認められた。さらにSNSやブログへの書き込みについても、注意深くなかなか書き込みを行わない方向にあることが示唆された。自己隠蔽の低い群においては、楽しいことや趣味についての書き込みは高い群と同様に行い、さらに落ち込んでいることについても、「少し書きこむ」という回答で有意差があることから、自己隠蔽度が低いほど、SNSやブログなどへの書き込みを行う傾向があることが示された。

本研究では、自己隠蔽についての分析を検討したが、アンケートにある自己開示についても同様に分析検討していくことで、大学生が新しいコミュニケーションをどのように考えて対応しているかについての報告が可能となると思われる。

謝辞：本研究は平成26年度電気通信財団の研究助成金を用いて行われた。データの収集には、宇根綾佳さんの協力を得たので、記して感謝する。

参考文献

1. 中田美喜子, コンピュータを利用したコミュニケーションと人間関係(2) —女子大学生の意識調査から—, 広島女学院大学論集62, 1-10, 2012-12-19
2. 中田美喜子・記谷康之, コンピュータを利用したコミュニケーションと人間関係 —女子大学生の意識調査から—, 広島女学院大学論集61, 131-138, 2011-12-21
3. 尾上恵子, 女子学生の人間関係構築における諸要因について, 一宮女子短期大学紀要46, 15-22, 2007-12
4. 橋元良明, 中村 功, 関谷直也, 小笠原盛浩, インターネット利用に伴う被害と不安, 東京大学大学院情

報学環情報学研究. 調査研究編26, 27-80, 2010-03-30

5. 目黒公郎, 大原美保, 沼田宗純 [他], 近藤伸也, 3. 11net東京 (東日本大震災復興支援研究者ネットワーク) の活動報告 その1, 生産研究63 (6), 735-737, 2011
6. 坂本季実子, インターネット上における大学生の自己開示に関する要因, Kwansai Gakuin policy studies review, (13), 1-29, 2010-03-20
7. 河野和明, 自己隠蔽尺度 (Self-Concealment Scale) および抑制的会話態度尺度の尺度特性: 記述統計と因子分析, 東海学園大学研究紀要. 人文学・健康科学研究編13, 45-52, 2008-03
8. 山本太郎, 千葉直子, 間形文彦 [他], 高橋克巳, 関谷直也, 中村 功, 小笠原盛浩, 橋元良明, ネット上の不安に関する質問紙調査におけるCGM利用の有無による差異について (セキュリティと倫理, 一般), 電子情報通信学会技術研究報告. SITE, 技術と社会・倫理110 (231), 25-30, 2010-10-08
9. 橋元良明, 調査から見た被災地におけるメディアの役割 (<特集> 震災後のメディア研究, ジャーナリズム研究), マス・コミュニケーション研究 (82), 19-34, 2013-01-31
10. 山本太郎, 橋元良明, 中村 功 [他], 関谷直也, 小笠原盛浩, 千葉直子, 関 良明, 高橋克巳, Twitter利用を中心とする震災時の情報行動と通信不安: 関東Twitter利用者ウェブ調査, 東京大学大学院情報学環情報学研究. 調査研究編28, 115-160, 2012-03-28
11. 橋元良明, 新たな時代の情報の受容と発信 (<特集> 情報の収集と発信), 情報の科学と技術63 (12), 480-485, 2013-12-01

